

## 北ノルウェーにおける民俗舞踊とコンテンポラリーダンス

——舞踊団 Kartellet の実践とその文脈

武藤大祐 (群馬県立女子大学)

1980年代のフランスに端を発するコンテンポラリーダンスは、北欧諸国にも根付き、多様に展開されてきた。しかし近年、特にノルウェーにおいて、民俗舞踊の実践者や研究者から、「コンテンポラリーダンス」の概念をめぐる問題提起が盛んになされている。

イングリ・フィクスダルによれば、「今日の北欧では、芸術としての舞踊 (dance-as-art) といえはコンテンポラリーダンスと呼ばれるジャンルを指し」(Fiksdal 2022: 7)、他のジャンル、すなわち地域に根差した民俗舞踊や、ジャズダンスやアフリカダンスなどの娯乐的／伝統的な舞踊は除外される。こうした偏向は、大学での芸術教育カリキュラムに反映され、ひいては制作活動や上演を支える公的助成金の分配にも影響しているという (Fiksdal 2022: 7)。舞踊学者のエギル・バックカもまた、創造性と自己表現を重視する近代的な舞台芸術としての舞踊のみが公的に価値付けられ、共同体での対人的な相互行為を楽しむ伝統的な民俗舞踊を軽視する状況に異議を唱えている (Bakka 2021)。

興味深いことに、こうした論者たちはしばしば、公共圏におけるコンテンポラリーダンスの偏重を「植民地主義」という言葉で批判し、「脱植民地化」をアジェンダに掲げる。その背景には、19世紀から伝統舞踊を保護、振興してきた北欧の近代化の歴史 (Bakka 2018) があり、また少数民族のサーミや、諸外国からの移民との多文化共生という今日的な課題もある。それぞれ文脈は異なるが、そうした差異を超え、特定の舞踊文化を周縁化する権力構造に争点が集約されているのである。

この意味での「脱植民地化」の試みとして、民俗舞踊とコンテンポラリーダンスの文脈を具体的に接合しようとする実践も見られる。中でも近年、社会的な注目を集めたのが、ノルウェー各地で伝統的に踊られてきた男性の民俗舞踊「ハリング」(halling) を基盤とする舞踊団フリカル (Frikar) である。フィドルなどの演奏とともに一人ないし二人組で踊るハリングは、リズムカルなステップと旋回、および跳躍によって男性的な力強さと柔軟性を競って楽しむ伝統的な娯楽であるが、フリカルはこれにカポエイラやブレイクンの要素を加えるなどしてアクロバティックな身体表現を編み出し、派手な舞台演出を伴った群舞や現代サーカスにも似たパフォーマンスへと発展させて、2000年代から高く評価されている。

他方、同じくハリングを土台として活動する舞踊団にカルテッレ (Kartellet) がある。大きな舞台での表現を開拓したフリカルとは対照的に、カルテッレはあくまでも民俗文化としての舞踊の価値観にこだわる姿勢を示しており、本発表ではこれに注目する。彼らは、劇場での上演であっても、観客の視覚に訴えるスペクタクル性や、公共

の場に供される作品としての形式的洗練に重きを置かず、あくまで伝統的な民衆娯楽としての遊戯性を維持しようとしており、ここに北欧でのコンテンポラリーダンスと民俗舞踊の断絶に対する一つの応答が読み取れるからである。

具体例として2024年5月に初演された彼らの作品を取り上げ、6月の北ノルウェー芸術祭 (ハーシュタ) での観察に基づき考察を加えたい。本作 *Rækved* (「流木」の意) は北極フィルハーモニー (Arktisk Filharmoni) とのコラボレーションで、ノルウェー各地の伝統的舞曲や、それをもとに書かれた曲の演奏とともに5人のダンサーが踊る。会場は客席数1000の劇場であり、上演時間は約70分である。全体は12の場面から成り、曲とともにダンスの種類も変わるが、いずれも即興で、軽く走りながら円陣をなして一人ずつ技を披露したり、互いに激しくぶつかるようにして組み合わせるとは離れるなど、素朴なゲームのように戯れる。大掛かりな演出を加えず、むしろ舞台前面を多く使って踊り手の体重や衝突音、呼吸、視線によるやり取り、興奮や疲労などを観客の眼前に生々しく差し出す点に特色が見出せる。カルテッレは、西欧で発達した「芸術としての舞踊」すなわちコンテンポラリーダンスの枠組に、あえて粗野な「相互行為」(Bakka 2021) を楽しむ民俗舞踊の価値観を意識的に持ち込んでいるのである。

モダン／コンテンポラリーダンスが民俗舞踊を舞台表現の素材として「活用」してきた歴史は長い (武藤 2020; Shea Murphy 2022)。しかしここに瞥見したノルウェーでの動向は、それとは反対に、民俗舞踊の側からコンテンポラリーダンスへの戦略的な働きかけと見るができる。

### 【参考文献】

- 武藤大祐 (2020). 「ヴァナキュラーな舞踊を枠付け直す—ショーネッド・ヒューズと柿内沢鹿踊の協働」、『群馬県立女子大学紀要』41:169-182.
- Bakka, Egil (2018). “The Norwegian Folk Dance Movement in Political Perspective,” in: *Folklore Revival Movements: Shifting Context and Perspectives*, eds. Daniela Stavělová and Theresa Jill Buckland, Prague: Institute of Ethnology of the Czech Academy of Sciences, pp. 87-100.
- Bakka, Egil (2021). “Contemporary Dance - Universal Claims - Colonialism,” *Academia Letters*, Article 571. (<https://doi.org/10.20935/AL571>)
- Fiksdal, Ingri Midgard (2022). “Coeval Dancefutures in the Nordics: Dance-as-Art after the Decolonial Turn,” *Nordic Theatre Journal* 34(1): 4-21.
- Shea Murphy, Jacqueline (2022). *Dancing Indigenous Worlds: Choreographies of Relation*. Minneapolis: Minnesota UP.
- (本研究はJSPS科研費21K00193および23H00594の成果の一部である)